

歩行速度の低下は認知症の予測因子

運動認知リスク症候群（MCR）は各国で新たに説明されている前認知症候群で、遅い歩行速度と軽度の認知異常が特徴とされている。本研究では、運動認知リスク症候群の頻度と認知症との関連について検討した。

17カ国22の集団から、認知症および認知障害のない60歳以上の成人26,802例のデータを収集し、運動認知リスク症候群の有病率について分析を行った。また、4件の前向きコホート試験から、試験開始時における認知機能検査(MMSE)のスコアが25以上の、認知症のない4,812例のデータを収集し、認知障害発症リスクおよび運動認知リスク症候群に関連する認知症リスクについて統計学的に分析した。その結果、試験開始時において26,802例中2,808例が運動認知リスク症候群と判定された。運動認知リスク症候群の有病率は9.7%と算出され、高齢者で高かったが、性差は認められなかった。運動認知リスク症候群は認知障害の発症リスクを予測し（補正後ハザード比：2.0）、認知症の予測因子でもあった（補正後ハザード比：1.9）。早期認知症やその他の前認知症症候群を合併している者など、認知障害の可能性を有する被験者を除外した場合も、この結果は一貫して認められた。

したがって、運動認知リスク症候群が高齢者に多く、認知機能低下に対する強力で早期のリスク因子であることが示唆された。この臨床的アプローチはハイリスク高齢者を特定する場面において容易に適用可能である。

出典：Neurology. 2014; 83(8): 718-726